

幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.10
平成7年11月11日

高秀市長への提言 (要旨)

横浜能楽堂開設準備委員会

昨年(平成六年)の九月二十一日に発足した、横浜能楽堂(仮称)開設準備委員会は、本年(平成七年)七月二十六日まで約十ヶ月、正式の委員会は四回、舞台披き実行委員会、小委員会など数回の専門委員会を含め、きわめて真剣に議論を重ね、その成果を集約し、八月三十一日、高秀秀信横浜市長に対して、「横浜能楽堂開館へ向けての提言」を、新堀豊彦開館準備委員会委員長から手渡された。

横浜市はこれを用いて、九月定例市会に能楽堂設置条例案を提出した。

これによって昭和四十年代から、根気よく続けられてきた、横浜能楽堂建設はいよいよ開館に向けて本格的に動き出すことになった。ちなみに平成八年三月には建設が完了。同六月末に舞台披き、七月から一般の利用が可能となる。

この十一月十二日からその受

付も開始される。

提言の内容は多岐にわたっていること、全文をここに掲載することは不可能なため、記者発表の際の要約を中心に、参考に供したい。

「はじめに」

能についてその現代に占める位置、詳細を明確にし、また横浜における過去、現在の状況にふれ、空前のブームといわれながら、一方、これからの能楽は従来の枠にとらわれず、演ずる人、習う人、鑑賞する人など、それぞれの領域において、新たな層を掘り起こしていくことの必要性」を強調している。

本文は六項目の柱が立てられ、
(一)横浜能楽堂運営の基本方針

①能楽をはじめとする

古典芸能の振興のために

②横浜能楽堂の役割

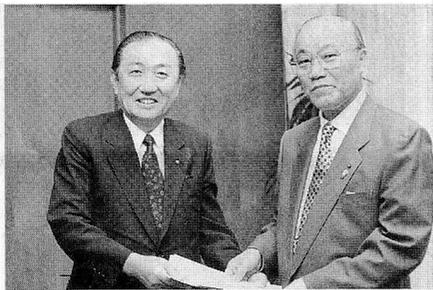
①能楽をはじめとする古典芸能

の殿堂としての役割
②公立施設としての啓発、普及的な役割

③国際文化都市の核施設として国際性を高める役割

④中長期的な視点の導入による事業計画の策定

開館期、普及期など館運営の計画期間を設定し、それぞれの時期に見合った自主事業、共催事業及び貸館事業を総合的に計画したい。



右・高秀市長、左・新堀委員長

(二)自主公演のあり方
①公立能楽堂が行なう

②優れた能楽鑑賞機会の提供

③能楽鑑賞の機会を広げる取り組み

④能楽支持層を広げる取り組み

⑤市民の要望、意見を反映させる仕組みづくり

(三)能楽の普及、啓発
①能楽の普及、啓発を進めるために

②能楽への興味、関心を喚起することによる支持層の拡大

③児童、生徒、大学生などへの普及活動の実施

④学校教育との連携
例えば、解説付普及公演、初心者向け教室、紹介ビデオ製作資料展示等や、大学等の課外活動への働きかけなど事業展開をはかる。

⑤国際的視点の導入
①国際文化都市として
その特徴を生かすために
②館運営への国際的な視点の導入

③みなとみらい21地区に隣接
④中長期的視点に立った国際交流の展開
外国人向けの普及、啓発プログラムづくり、アフター・コンベンションでの活用などの事業展開が考えられる。

(四)活動の支援、育成
①市民の文化活動のレベルアップと活動支援のために
②若手、中堅の能楽師に対する支援
③能楽愛好者への支援、育成
④新人能楽師の登竜門となるよ

うな出演機会の提供をはじめ、水準の高い講座、教室の開催など、愛好者のために効果的な事業の展開。

(五)施設の活用
①市民に親しまれる
②利用者の立場に立った施設運営
③市民に開かれた能楽堂
④古典芸能に関する市民から多様な事業プログラムの展開をはかり、事業の企画や運営への市民参加を求め、他の文化施設利用に関するネットワークづくりなどの事業展開をはかる。

市としては最初の専門文化施設であり、実際の運営は横浜市文化振興財団に委託することになるが、他の公共文化施設にない運営体制を考えている。

特に館の顧問には舞台披き実行委の山崎有一郎委員長を迎え、地元能楽関係者、学識経験者、教育関係者など含めた強力な運営委員会を設置し、その運営に万全を期すかまえてある。

舞台使用料等については、全国の類似能楽堂(公立)の状況をふまえて、出来るだけ安く利用に供せられるよう努力し、東京の国立能楽堂よりはかなり低めの貸館料が設定される。

五流謡曲大会報告

連盟常務理事 中島秀次郎
海 謡 会

第十一回五流合同謡曲大会は、予定通り五月二十八日の午前十二時に、海謡会の松本さんの仕舞「高砂」により幕が開けられ、午後四時四十分、喜多流の素謡「花筐」で終了しました。

この間、六時間余にわたり、正味出演者百六十名による謡十八番、仕舞十一番、一調等五番が演目のバランスもよく、正に好演の続出という形で演じられました。囃子の充実の割に、仕舞がやや淋しいかなとは番組編成時の感想でしたが、いづれも粒選りで、囃子・舞とも大いに楽しませていただきました。

謡については、ベテランが新人(失礼)をうまく包み込み、全体として調和のとれたよい謡になっていたというのが、借越ながら私の偽らざる感想です。



独鼓「高砂」

こういう大会では、自分が演ずることも大切ですが、人様の演技を拜見することがよい勉強になり、同好の士としての礼儀でもあるというのが私の持論ですが、今回の大会では最後まで見所が大勢の人で埋められていたことは喜ばしい限りでした。不慣れで非力な私共が、皆様の御協力で何とか幹事役を全う出来たことを心から感謝申し上げます。また個人的感懐で恐縮ですが、久良岐能舞台での最後の五流大会の幹事を海謡会が担当出来たことは、亡き宮越賢治先生にも大いに喜んでいただけたのではないかと思っています。

蝉丸の雨

金春流 宮本 木末
春巳会

暑かった夏も過ぎて、秋の気配が漂ってきたが、今年にはじめ冷夏と予想されただけに、梅雨が長かった。梅雨らしい梅雨で、六月から七月にかけては、毎日雨を眺めて暮らしたような気がする。しとしとと降り続ける雨音を聞いていると、いつも思いつくことがある。「蝉丸」である。

狂乱し、路頭をさまよう皇女逆髪と、盲目のため棄てられた弟宮の蝉丸が、逢坂山で出会う



宝生宗家急逝を悼む

宝生流第十八世宗家・宝生英雄師は、九月十五日、急逝された。享年七十五歳。故宝生九郎重英の長男として生まれ、戦後宝生流の中心として活躍、能楽協会々長としても斯道発展のため尽くされた。

横浜能では、第一回目より出演され、何回かその重厚な演技を市民に披露されている。

葬儀は水道橋宝生能楽堂で、九月十七日通夜、十八日告別式が行われ、葬儀委員長には観世清和・観世流宗家がつとめられた。

当日は、横浜市長の代理として佐野市民局文化部長が参列、渡井宝生流教授囑託会神奈川県支部長、新堀横浜能楽連盟会長らも弔問した。

能楽から学ぶもの

喜多流 吉田 州男
洋謡会

それぞれ乞食となつてさまよう二人の明日をも知れない運命の悲しみ。そうしたもろもろの悲しみを象徴するかのように、雨が降る。登場人物は誰も、この不条理な悲しみに異を唱えることもなく、受け入れる。雨が降ることが仕方がないのと同じように。雨と涙は似ている。この救いようがない哀切なドラマはその後二人の運命がどうなっていくのかには触れず、天のみが涙の雨を流し、その涙で浄化されるかのようだ。

物語である、この能の中で降る雨は、謡本では村雨、つまり通り雨なのだが、全体を支配しているのはひそやかな雨の音のよくな気がしてならない。とぎれなく降る雨音の中に、ぼつんと立つ侘しい藁屋、そこから琵琶の音色が流れてくる。それに引き寄せられるようにして二人は、つかの間出合い、別れる。

もういぶん以前になるが、師の守屋と四郎、泰利先生の「蝉丸」を観た時、作り物の藁屋の軒にしたたり落ちる雨の滴を見、小止みない雨音の中から低く腹にしみとおる琵琶の音を聞いた気がした。「蝉丸」は幾度観たかわからない。が、泣いたのはそのとき一度だけだった。この能にはさまざま悲しみが詰まっている。高貴に生まれた姉弟が棄てられる悲しみ、心を病む身と盲目の身の悲しみ、蝉丸を棄てることを命じられた出合いと別離の悲しみ、そして、

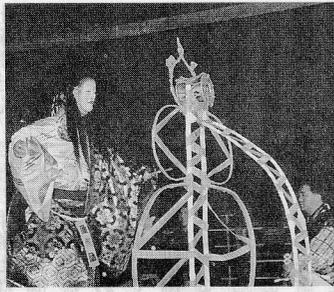
今夏、記録破りの猛暑も、九月の声を聞くなり、さわやかな秋風につつまれて、喜多流恒例の「謡曲と仕舞のつどい」が、九月十日、久良岐能舞台に多数の能楽ファンを集めて、華やかに開催されました。応募の中から、選ばれた市民の方達の熱気が、会場一杯にあふれて、演じる側も平素の稽古の実力を存分に発揮した為か、控えの間に帰ってくる顔も、自分の出番が終ってホッとされた様子。反省の弁も笑顔で、お互いを誉める余裕すら感じられる、和やかな雰囲気、実に清々しい限り。

私達洋謡会も、本日のトリと

して緊張の中にも本番の強さを遺憾なく出し切って、無事に終演いたしました。

今年も、去年に引き続き客船にっぽん丸で小笠原クルーズに参加し、八月二十八日夕刻父島に停泊し、船上新能として「天鼓」が上演されました。

演者は勿論、喜多流のエース、シテ・友枝昭世先生に、ワキ・森常好先生、地頭・出雲康雅先生等、一流の先生方の競演で、このクルーズに参加された船旅の人達も、遠く本土を離れた孤島の海に浮く、にっぽん丸の甲板に特設された舞台上で、日本伝



船上新能「天鼓」

統文化の粋といわれる能楽を鑑賞できる幸運と、その幽玄の極致ともいえる演技に驚嘆の声をあげ、真夏の夜の夢に酔いしれておられました。

九月十三日には、横浜能楽堂開館イベントとして「かもんやま薪能」が催され、喜多流から

は「経政」が、シテ・喜多六平太、ワキ・高井松男他の先生方で上演され、詰めかけた市民の皆様も、その芸の素晴らしさを堪能されておりました。

能楽が、こんなに多くの人達に愛されるのはなぜなのでしょう。か、と。殺伐とした世の中で日本人の心の奥底に埋もれていたものが、そこに発見できるからなのでしょう。

来年には、横浜能楽堂も完成します。ますます稽古に精進しなくてはと、素直に反省しております。

私と謡曲

梅若流 志村 英世

私が能を初めて拝見したのは、大学生活も終る頃であった。二子多摩川の能楽堂へどちらが誘ったのか忘れたが、二人で肩を並べて見に行った事からである。ざわざわとした客席は、ピーという笛の音でさっと静寂の気がみなぎったことを今でもはっきりと思い出す。演者は足にびったりとついた白足袋で床に吸いついた様に、摺り足で出て来る。上体は少しも動かさず、構えは一分の隙もなく、いつしか衿を正して、拝見した。その後何年か経て丁氏に誘われ、謡を習い始め、もはや十年以上経ってし

まった。まだ数える程の曲目しか稽古をして居ないが、いつの間にか亭主の好きな赤烏帽子とかで、夫婦で同じ趣味を持つ事が出来、春、秋の旅には必ず謡本を持参し、シテ、ワキに分かれて謡って居る次第である。この度、横浜能楽連盟の一員として参加させて頂き、内容が幾分判って来た様です。先輩諸氏の御指導で会計監査を受け持ち、会計資料の内容の説明を受ける度に、役員の方々の並々ならぬご苦労が理解され、特に会長始め副会長、常任理事の方々は、手弁当無報酬で熱心に行なって居られ、横浜能の開催又、横浜能楽堂の建設については、永年努力に努力を積まれ、素晴らしい成果を収められた。この様な役員の皆様の連盟に対する情熱が無料奉仕なる犠牲をのりこえ、連盟の運営発展に貢献して居られます。平成八年には、待望の横浜能楽堂が完成され、我々能楽愛好家の希望の星となり、横浜の皆様が多数、能に関心をよせて下さる事でしょう。横浜能楽連盟の益々の発展を祈念してやみません。

能 雑 感

喜多流 伊藤 節子

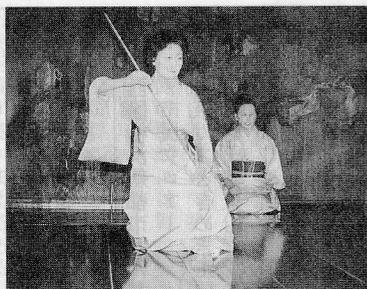
喜多流の謡と仕舞を習い始め

てから、早くも四十年近い年月が過ぎようとして居ります。何事にも飽き易い性格を自認している私を、ここ迄駆り立ててくれた能の魅力とは一体何であったのか、今更ながら不思議な気分が致してまいります。学生時代の私は熱狂的な歌舞伎ファンで、大方の狂言のサワリ部分は殆ど暗記している状態でした。ごく偶に観る能の舞台は、ただただ眠いだけだったように思いますが、大学の歌舞伎研究会で、何人もの役者の話を聞く機会がありました。当時の坂東三津五郎が歌舞伎の「勸進帳」と能の「安宅」を比較して、歌舞伎の弁慶は富樫が勸進帳を覗き見しようとする、サツと巻物をかくして見せまいとする演技をするのに、能の弁慶は一切小細工を弄さないで一気に勸進帳を読みあげる、そういう所に能が持つスケールの大きい男性的な魅力を感じるとい話をしてくれました。当時の私は「そんなものかな」と思って聞いていただけで、やはり「安宅」よりも「勸進帳」の方が面白いと思っ

て居りました。しかし、あの極端に誇張された演技で感情を表現する歌舞伎の舞台に、素直に溶け込んで泣いたり笑ったりしていたのは、私はまだ人生の曲折を何も知らず、無条件で毎日

の生活を楽しんで居られた青春の時期にあったからのようでした。自分でも様々の体験をし、人生の喜びや悲しみを実感する年齢に到って、あれほど面白かった歌舞伎の誇張の演技が煩わしくなり、極度に抑制された能の舞台に接している時に、突然、自分の体の奥底から強烈な感情が揺り起こされて来る経験をしようになりました。その最初の体験は、藤戸の能で「彼の岸に到り到りて成仏」と杖を落し、

「得脱の身となりぬ」と合掌の型に移るまでのほんの数秒間、全く放心したように立ちつくしたシテの姿から凝縮した情念が



仕舞「藤戸」

ほとばしり出て、私は深い深い感動に襲われ、思わず涙があふれて来たのでした。観能も稽古も、理屈が先に立った若い頃に比べると、物を観る眼も少しは開かれ、心もいさ

さか深くなったと思われるのですが、世の中の皮肉な事には、知的充足は肉体的衰退を伴って来るといふ現実には、幼少の頃から鍛錬に鍛錬を重ねたプロと違って、私共素人は、どんなに努力してもこの事実から逃れる事が出来ません。耳順の年齢となつて、私も稽古のたびにこの悩みを味わって居るのですが、この現実にあまり逆らわず、代わりに与えられた眼と心によって一番でも多く良い能の舞台に出会う事が出来ますように願つて居ります。

久良岐舞台での謡曲教室との御縁によって得られた多くの方々との出会いも、能が私にもたらしてくれた幸せの一つと、改めて感謝致して居ります。能は、私にとって自分の精神力と体力の全部を出しつくしてしまつた後に残る、例えようのない幸福感を教えてくれた存在でもありました。これからはもっと、私の心の支えとなつてくれるものと思つて居ります。

金剛流謡曲と仕舞のつどい

横浜金剛会 桑 良一

今年は何年になく暑さの厳しい八月二十七日に開催されましたが、多数の市民の皆さんに足



狸々の装束付

を運んでいただきました。今回は、前回の「花」に継いで「月」を全体のテーマとして月に因んだ曲を、連吟五番、仕舞十三番で編成しました。

「月と松」の高砂、「月と桜」の田村、「月と湖」の竹生島など出演者四十八名が、日頃の稽古の成果を披露しました。

金剛流のつどいでは装束付が好評とのことで、今年も田村信一郎先生のご指導で、一門の若師により「狸々」の装束付をお見せしました。流友の女性が付けてもらい、赤色づくめの唐織、大口赤頭に狸々の面をつけて、仕舞のキリを舞ってもらいました。

見所の皆さんには、能の雰囲気気を少しは味わっていただけただけだと思つております。

また来年のつどいには何をテーマにして、どんな曲を選ぶか、流友の方々と悩み、かつ楽しみたいと思つております。

横浜宝生連合会謡曲大会について

横浜宝生流連合会 秋山 尚

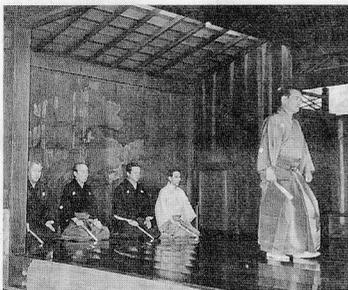
当連合会は、戦前・戦後を通して横浜はもちろん、広く神奈川県下の流友、謡曲愛好者が集まり、盛大な大会を催しております。当流の人間国宝でもあられた故近藤藤三師、故高橋進師をはじめ、多数の家元職分にお越し願ひ、手厚い御指導を頂いております。

一時期、会員の老齢化等もあり、活動が中断しておりましたが、現会長新堀豊彦氏の肝入りで会が復活し、会員も約五百五十名を数えるに至りました。再開後、今年で第八回目の謡曲大会が、去る八月二十六日(出久良岐能舞台で華やかに開催されました。当日は、素謡が二十三番、独吟二番、仕舞十八番、居囃子一番、舞囃子一番と終日一杯となる盛沢山の番組となり、再

足元以来最高の大会となりました。出演者も百七十名余を越え、見所においても立錫の余地が無い程に盛況となり、謡曲の道も益々盛んになっていくことを確信した次第であります。

本大会には、家元重鎮職分であられる高橋章師(前述高橋進師御子息)、中堅職分では横浜在住の塚田光太郎師、大坪喜美雄師に御来会を願ひ、素謡・仕舞の地頭をお勤め頂き、格調の高い御指導を賜つた。更に番外として、各師に仕舞三番を舞って頂き、家元職分の至芸に会員一同が酔いしれ、充分に満足した一日でありました。

明年は新装なる横浜能楽堂にて、八月二十四日(出)に開催が予定されており、本格的な能舞台での出演に、会員が今から張り切つて稽古に邁進しております。御関係者の皆様にも多大なる御支援、御協力をお願いし、当会の最近の活動状況を御披露申し上げます。



仕舞「西行桜」

横浜能楽連盟 連絡先

●文書(輸送)又はFAXの場合
〒233横浜市港南区丸山台二
一九一七新堀方 FAX
〇四五―八四四―二九〇三
●電話の場合
横浜市役所 〇四五―六七―
一一二二

市民局文化事業課 渡辺

場所 西区横浜新都市ビル九階

・市民フロア

能面製作愛好家十九名の作品若女、小面はじめ山姥、狸々など四十一種七十二点を展示しました所、延べ千七百八十四名の方が来場して下さいました。

また来年も五月に開催する予定です。よろしくお願ひ致します。

編集後記

横浜能楽堂(仮称)開館準備委員会の提言要旨を第一面に掲載しましたが、御参照の上、能楽堂が立派に運営されるように御協力下さい。今回も多数の原稿をお寄せいただきましたが、紙面の都合で割愛又は次号送りにさせていただきますものがあつたことを深くお詫び致します。

次号は能楽堂開館記念特集号となる予定です。

(N記)

第六回面寿会能面展

面寿会会長 田中 秀朋

貴連盟の御支援を得て、標記能面展を実施しましたので御報告致します。

期間 平成七年六月十四日(休)より十七日(休)まで四日間